



自ら開発した石油処理剤の浄化能力を説明するオッペンハイマー博士

微生物利用し石油処理

米人博士招き
舞鶴で初実験

生態系を傷つけないとい
う、微生物を利用した新し
い石油処理剤の浄化力を試
す、日本初の公開実験が十
七日から、処理剤の開発者
で元テキサス大教授のカー
ル・オッペンハイマー博士
(左)を招いて、舞鶴市長浜
の京都大学水産実験所で始
まった。

この処理剤は油を食べる
バクテリアと、その栄養分
などの混合粉末。増殖した
バクテリアが油を無害の脂
肪酸に変え、最後はバクテ
リア自身とともに魚介類の
エサになる。すでに一九九
〇年にメキシコ湾で起った
原油流出事故などで使用
され、大きな成果を挙げて
いるという。

従来の処理剤は、その強
い毒性から、環境への影響
を懸念する声が強い。一九
九〇年一月に丹後半島油で
起きたマリタイム・ガデー
ニア号原油流出事故でも処
理剤が使われたが、地元漁
業者らは「いまだに後遺症
がある」と指摘する。

実験には、アサやカワハ
ギ、クルマエビを入れた五
百リットルを使用。五十七
十五リットルの原油を流し、二
十、三十の処理剤を投入し
た。数分後には、水面の原
油が脂肪酸に変わり始め、
浄化の速さを証明。博士ら
はバクテリアをクルマエビ
などが食べ尽くすまで、二
十四時間観察を続ける。

この方法は、マア号事故で深
刻な被害を経験した地元漁
協や舞鶴海上保安
隊の関係者からも
熱心に処理剤の
適用事例を掘り
出した。
博士は十九日、
二十日に東京大

Kyoto Newspaper